

新幹事になって

東京秋工会 幹事

山形 俊男

(昭和39年機械科卒)



真面目で無駄口を一切しない寡黙な人だった。年中日焼けした顔で夏場は赤銅色に焼けた上半身と両腕で舟を自在に操っていた。その彼を毎朝眠い目をこすりながら、呼びに起こしに行く日々が学校を卒業するまで続いた。

そんな船頭さんに今でも感謝している。朝一番の利用は勿論の事、時には学校の掃除当番で午後8時半の最終列車で帰る事が時々有った。そんな時、私の帰るのを家族のように心配して向こう岸で待機してしてくれた。(通常は午後6時頃に帰宅)

また今でも忘れられない鮮明な思い出がある。前夜からの大雨で翌朝川の水位が増し流れも激しくなって、鋼鉄ワイヤーと川の水面の高さに余裕が無い。果たして向こう岸に無事運べるかどうか不安を抱く中で、降りしきる雨の中でカッパを着た彼は、『行くぞ!』と一言声を掛け、敢然と舟を進めて私を向こう岸まで運んでくれた。

彼は何事も無かったように『雨が小降りになってきたナ! 帰りはいつもの時間か?』といつものように声を掛けてくれた。私は無精に嬉しかった。お陰で無事学校に登校出来た。

私はこれがプロの仕事だと思った。普段はラクに見える仕事だが、この様な緊迫した状況の中で、彼は自分の仕事に“プライド”を賭けて果敢に挑戦し実行した。その毅然とした態度がとても清々しく、私にはとても眩しかった。

あれから50年近く経っているが学校に無事通学できたのは、この船頭さんを始め家族や周りの人たちの“ご理解とご支援”のお蔭です。いくら感謝しても感謝し切れません。

この時の貴重な経験が、その後の私の人生に『不撓不屈』の精神を植え付けてくれた。

(2) 自分を救った民謡

A. 民謡への興味

小学生の頃ラジオの前に座ってよく歌を聞く事が多かった。この頃の秋田若手民謡代表が『NHKのど自慢』で全国優勝する事が多かった。小さな私でも随分励まされて勇気を貰った事を覚えている。そのせいもあって徐々に民謡への興味が増していった。

故郷角館は『飾山囃子』で全国的に知られている。小さい頃に聞いた横笛の素晴らしい音色(拳ばやし、秋田音頭、秋田甚句、秋田おぼこ等)は幼な心に強く印象に残っている。それも民謡への興味の要因になった。このため社会人になって生活に余裕が出たら、民謡をやってみようかと漠然と思い描いていた。

B. 民謡を志す発端

昭和39年富士通小山工場に入社した頃は言葉の劣等感から日々落ち込む事が多く、何事に対しても消極的だった。これではいけない『変わらなければ』と苦悩する日々が続いた。悩んだ末に一つの解決策として何か“特技”を身に着ければ、それが心の支えになり『自分が変わる』きっかけになるかも知れないと真剣に考えるようになった。

幸い入社3年目に工場に民謡部が発足した。直ぐ入部して稽古を始めたら先生から、君の歌は「未だ味まで行かないが“故郷の匂い”がする」と褒められた。民謡に大切な言葉が逆に有利になって言葉の劣等感から解放された。また小さい頃から民謡を良く知っていた事もあって稽古が楽しく民謡にノメリ込んだ。これが民謡を志す発端になった。

しかし小さい時に聞いた歌を一度唄って見たが“ノド”が思うようにならなかった。ただ毎日稽古を重ねているうちにノド

から力が抜け、自然と腹から声が出るようになった。そして小さい頃聞いた民謡の雰囲気、少しずつ表現出来るようになって行った。

C. 練習相手と有名演奏家の名言

私にとって幸運だったのは、民謡部の発足に合わせて尺八師匠に弟子入りした人がいた。そこで彼にお願いして毎日お昼の休憩時間に尺八練習と一緒に民謡の稽古をさせて貰った。

彼とは昭和46年川崎工場転勤まで約3年間、お昼の稽古を互いに励まし合って行った。私にとって最も大切な民謡基礎固めの時期に、彼と一緒に稽古出来た事は“幸運”でした。

それと民謡を始める前に友人に誘われて、民謡の発表会を聞く機会が有った。会場で渡された発表会のパンフレットの中に、某有名演奏家が“芸上達への秘訣”を掲載していた。

非常に印象深い名言だった。“芸事の真髄に触れた”ような気がして、私の心に深く沁みだ。

人間天性の能力には大差は無い。毎日興味を持って反復練習に励めば1~2年後には見違える程上達する。“芸事で上達するのに近道は無い”毎日の練習が芸上達への秘訣だと。

もし民謡を始めたら実践して上達を目指そうと思った。それが昼休みの練習になった。

D. 本格的民謡への挑戦と“秋田おぼこ”

民謡の稽古から3年後に、本格的民謡を志して栃木県佐野市在住で民謡日本一に輝いた“大出直三郎”先生に弟子入りした。

弟子入りした数日後に、故郷の“秋田おぼこ”を唄った。歌い終って師匠の顔を見たら笑っていた。『君は何故この歌を唄わないのか?一度民謡コンクールに挑戦したらどうだ?』『この歌なら郷土色に溢れていて予選通過は確実だ!』

会社でこの歌を唄ったが、誰も褒めなかったと言うと、それは素人の耳だからだ。未だ唄い込みが足りないが、唄い込んだら将来が楽しみだ!『故郷の歌を大切に、秋田民謡で勝負しなさい!』と言われた。

誰もが自分に合う歌に巡り合うまで時間がかかり苦労する。私はその苦労がなく、師匠から君の歌は“秋田おぼこ”だと薦められた。これは本当に“ラッキー”だった。

E. 上達へ具体的な練習方法

本格的民謡稽古を始めて半年後に芸上達への具体的な稽古方法を師匠から伝授された。先ず発声練習する際に言葉で歌わず母音で練習する。母音練習は疲れるが最低3年以上続けたら普通の言葉練習と違って、歌詞や音階の明瞭度が格段に向上する。また声量も増す。

それに人前で歌うには最低千回の稽古。人を感動させるには万回以上の稽古量が必要だ。

これは一日の稽古を三回とすれば千回は一年で達成。万回はその十倍で十年目を意味する。

先日、宮本武蔵の『五輪書』を読む機会があった。いみじくも稽古量について同じ事が書いてあったのでびっくりした。

武蔵は“鍛錬”の言葉を引用して、千日の稽古を“鍛”、万日の稽古を“練”と呼んでいた。それは“芸事”は千日(約3年)の稽古を経た芸は一生の技として身に着く。百回の稽古では起らない質的な変化が千回の稽古によって起こる。

万日(約30年)という十年単位の稽古が更に積み重なると、千日の稽古で得たものより“格段に質的に高い技の認識”を得

る事が出来る。「量質転化」である。

武蔵は“芸事”で極意に達するには万日以上の地道な稽古量が必要だと言っている。

F. 『快心の歌の出来映え』への挑戦

現在『ある課題曲』に挑戦している。連日同じ稽古で“飽きないか?”と聞かれる。しかし私は『今日は心から上手く歌えた』と言う日が無い。必ず何か課題が起こる。長年稽古しているが、『快心の歌』を唄った試しが無い。大出師匠も同じような事を言っていたのを思い出す。練習後実感する事は、最近は技術面より体調(花粉症、疲れ)や心理面(悩み、ストレス)からの影響が原因と考えられる事が多くなった。でも好きな民謡を歌える身体にこの世に生を与えてくれた両親に感謝して、今日も『快心の歌』への挑戦が続く。恐らく『心・技・体』が充実して、融合した時に初めて叶うかも知れない。未知の領域“練”に到達するまで、挑戦への夢を諦める事なく日々修行して行きたいと考えている。

G. 民謡の成果と今後の抱負

私は民謡によって“アイデンティティ”を取り戻せた。何よりも自分の心の支えになる“特技”を身に付けた事が大きかった。思い返せば民謡を始めてからの気持は『やれば出来る』と積極的なものになり、「明るい未来への扉」をコジ開ける事が出来た。

各地の民謡コンクールで入賞や優勝した事で社内外で評判になり、皆から注目を浴びるようになった。これは私を取り巻く方々の心温まる“声援”や“支援”“助言”等により『教えられ』『励まされ』『成長させられた』お蔭であると痛感してます。

私は舞い上がる事無く冷静に謙虚に受け止め、自戒を込めて次の3つを守る事にした。!稽古はこれまで以上励行する”会社の仕事は手抜きせず確実に実行する#外部の眼が常に注目している事を念頭に置き公私混同を避け生活態度にも細心の注意を払うようにする。

これ等を着実に実行すると共に、クラシック、演歌、フォークソング、ポップス等の珠玉の名曲から心の琴線を触発させ『感性を磨いて』芸上達へ反映させたく考えています。

